

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
42(3/4): 335, 1995

□ 魚類相

Marine Fishes of the Ken-Ting National Park.—Kwang-Tsao Shao, Jeng-Ping Chen and Shi-Chieh Shen. 1992. Ken-Ting National Park Headquarters, Construction and Planning Administration, Ministry of Interior. 427 pp. 台湾南部にある国立公園の魚類をまとめた本である。水中写真、標本のカラー写真、各種の短い説明および検索表がついているが、すべて中国語。しかし、図鑑なので内容は大体理解できる。(KM)

The Collector's Guide to Fossil Sharks and Rays from the Cretaceous of Texas.—Roger F. Farish and Bruce J. Welton. 1993. Before Time, Lewisville, TX, USA. xviii + 204 pp. ISBN 0-9638394-0-3. ¥6,750 (税込)。(KS)

□ 分類学・進化学一般

Animal Evolution: Interrelationships of the Living Phyla.—Claus Nielsen. 1995. Oxford University Press, Oxford, England; New York, USA; Tokyo, Japan. xi + 467 pp. ISBN 0-19-854868-0. US\$45.00. 著者はコペンハーゲンの動物学博物館の研究者。魚類の高位分類群の系統

類縁関係はいまだに安定していないが、動物界全体の系統関係も同様に安定しているとはいえない。本書は魚類研究者にとって普段馴染みの少ない無脊椎動物(この名称は便利ではあるが、もちろん単系統ではない)を含む全動物群の系統関係を示している。(KM)

Vertebrates: Comparative Anatomy, Function, Evolution.—Kenneth V. Kardong. 1995. Wm. C. Brown Publishers, Dubuque, Iowa, USA; Melbourne, Australia; Oxford, England. xvii + 777 pp. ISBN 0-069-21991-7. 著者はワシントン州立大学の研究者。脊椎動物の比較解剖学や系統関係に興味のある人にとって必携の書。(KM)

□ 魚類学一般

Fish: An Enthusiast's Guide.—Peter B. Moyle. 1995. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, California, USA. xii + 272 pp. ISBN 0-520-20165-5. ¥2,060 (税込)。(KS)

The Rise of Fishes: 500 Million Years of Evolution.—John A. Long. 1995. University of New South Wales Press, Sydney, Australia. 223 pp. ISBN 0-8018-4992-6. 約 ¥7,000。(KS)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
42(3/4): 335-337, 1995

国際動物行動学会に参加して
—シンポジウム Ethology of Coral Reef Fishes に
おけるテーマの多様化—

猛暑のこの夏、もっとも航空運賃が高い日盆の8月10～17日に、第24回国際動物行動学会議(International Ethological Conference)がハワイのホノルルで開催された。日本からの参加者は、それぞれ飛行機の予約や費用の捻出に苦労したはず。着いてみると、宿舎と発表会場

に当てられたのは、まさにワイキキビーチを望むもったいないような(?)リゾートホテルであった。学会は40カ国から参加者547人という大盛況で、うち合衆国208、日本49、ドイツ48、オーストラリアとカナダがそれぞれ17(以下略)。運営上のさまざまな困難を、大学院生のボランティアの皆さんの力で乗り越えたようだ。Losey博士、Reese博士をはじめ、留学中の麻生氏、吉川氏、ハワイの皆さんに心より御礼申し上げたい。毎日午前中は4題のプレナリー講演があり、午後から各会場で口頭発表が行われた。ポスター発表は前期後期に分けて夕方行われたが、口頭発表の会場からやや離れていたし、時間

的にも短く、条件がよくないように思われた。午前中では何と言っても、Maynard-Smithの講演が楽しみであった。彼の講演 *The evolution of animal signals* は、何度も何度も会場が大笑いするほど楽しげな講演であったが、老齢の大家の英語は私には聞き取れなかった（情けない！）。筆者にとっては、去年、カナダのヴィクトリアで開催された EEEF (Ecological & Evolutionary Ethology of Fishes) に続いて2度目の海外での学会参加、1991年に京都で開かれた第22回 IEC を入れると3度目。EEEFは魚だけのこじんまりした家族的雰囲気、それがまたよかった。一方、行動学会は様々な動物群の話が聞ける規模の大きな大会である。今回のハワイ大会は、後述するように、4年前の京都大会とは内容の傾向も発表の仕方もずいぶん違っていたようだ。

会期の最後の2日間には *Ethology of Coral Reef Fishes* というシンポジウムが開催された（プログラム後掲）。英語の理解の乏しい上に、自分の発表のことで精一杯であった筆者の印象のみでは心許ないので、中嶋康裕氏と、狩野賢司氏、東 信行氏へのインタビューを併せて報告する。シンポジウムのはじめに Barlow 氏が挨拶をされたが、そのなかで、日本の魚類行動生態学の著しい成果に注目して、今回のシンポは多くの日本人研究者をメンバーにした旨を述べられた。これは、4年前の京都大会の折りに、琉球大学瀬底実験所で桑村哲生氏らによって主催されたサテライト集会在、とんでもない盛り上がりを見せたことと無縁ではなからう。筆者も運良く発表させていただいたが、あの会の熱気は忘れられない（魚雑 38(3) 会員通信参照）。日本の魚類行動生態学がこれをきっかけとして注目され、その後次々と発表される成果と相まって現在につながっていると思われる。

さて、今回のシンポであるが、狩野氏によると、研究の多様化が大きな特徴であろうとのこと。集中化していた幾つかの行動生態学的テーマから、様々な方向へ問題が広がっていく傾向がプログラムをみるとはっきり伺われよう。狩野氏は雄の評価を効率的に行うための雌の *Systematic Search Process* についての Sikkel の発表がもっとも面白かったとのこと。中嶋氏によると、記載的なもの多かった2日目より、1日目の方がよかったが、2日目の Mazeroll の発表した、集団で大きく移動するニザダイの空間認識に関する発表は興味深かったとのこと。筆者には、この Mazeroll と、それから3種類のチョウチョウウオのテリトリーと社会構造を比較した Righton、深さによる餌や競争条件の相違を植食性魚類について考察した Clifton などが新鮮に興味深く思われた。また、日本人研究者による発表が、内容的にも優れ

ている上、解りやすく工夫されていたことには、京都大会と比べて格段の差があったと思う（日本語での発表よりも解りやすいものもあった！）。英語の口頭発表でも、複雑な内容を伝えるのを諦めてはならない、とつくづく感じた。

シンポジウムに先立ち、繁殖に関する行動生態のセッションで馬場（狩野）玲子氏がムギツクの託卵に対抗するオヤニラミの戦略について、とても面白い発表をした。発表後、ふと彼女に近づいてきた女性が、今の発表はたいへん素晴しかったと激励された。名札を見ると Zuc となっており、Hamilton and Zuc の Zuc 氏なのであった。居合わせた筆者も感動した。

全体的にみると、sexual orientation のシンポをはじめ、性分化に関わる問題が非常に多かった。また、中嶋氏によると、京都大会から前回のバルセロナ大会で多くみられた、映像からの直接の解析を中心とした行動の記載が意外なほど減っていたことが印象的であるとのことであった（そういえば見ているだけで面白いのが京都の時は多かったのになあ）。東氏によると、Behavioral Ecology の発表が減り、生理学的なアプローチが目立ったこと（テーマの多様化とも関連して）、Conservation Biology のセッションが設けられたことなどが特徴的であったとのこと。

さて、著者は分からない英語と苦闘しながらも、強冷房に体調を壊しながらも（メチャクチャ寒かった。冷房が苦手のみなさん、ハワイの学会に参加するときには、防寒具も携えます）、結局いわばお祭りのような国際学会を楽しんでしまった。英語の壁はどうにも高い（どうしてこんなに高いのだろう！）が、ちょっと思い切れば（壁を乗り越えずに）楽しむことも十分可能なのだ。しかも1ドル100円内外であれば、信じられないほど彼の地の物価は安く、貧乏学生にも参加できる（渡航用の助成金を頂ける場合だってある）。これまで、論文で名前しか知らなかったあの人の人を実際に目の前でみると、思ったより若かったり、男でなく女だったり、気さくに声をかけてくれたり、そのうえ、発表を聞いて激励してくれたりするのである。さらに、いろいろな研究者とスコシは話をして、論文や講演で分からなかったことを（発表の場では出来なくてもあとで）質問することも出来る。それが出来なくても、論文をみてもらう約束をすることができる。同年輩の研究者（あるいは研究者の卵）と仲良くなり、将来にわたり、情報を交換し、互いに研究の可能性を検討できるのである。こうなれば、勇気を出して参加したモン勝ちである。参加した大学院の学生は皆そう思ったに違いない。

24th IEC Symposium "Ethology of Coral Reef Fishes"
organized by G. Barlow, T. Kuwamura & E. Reese

魚類学雑誌
42(3/4): 337-340, 1995

北九州市立自然史博物館

16 August

- Barlow, G. W.: Introductory remarks.
 Carlson, B. A.: Patterns of reproduction in the coral blenny, and female mate choice in a damselfish.
 Karino, K.: Colony size, male courtship display, and female mate choice in a damsel fish.
 Lutnesky, M. M. F.: The influence of population density on protogynous sex change in coral-reef fishes.
 Nakashima, T., T. Kuwamura and Y. Yogo: Why be a both-ways sex changer?
 Thaler, E.: Sex reversal and sexual behavior in the vermiculate wrasse (*Macropharyngodon bipartitus*).
 Goulet, D.: Sex in a coral reef fish: a female's perspective.
 Sakai, Y.: Inter-harem movement of female *Labroides dimidiatus* for earlier sex change.
 Sikkele, P. C.: Female mate-search tactics in a site attached marine fish.
 Akagawa, I. and M. Okiyama: Reproductive behaviour in filefish and triggerfish: comparison between seaweed bed and coral reef species.
 Godwin, J., R. R. Warner and D. Crews: The relationship of behavioral and gonadal changes in sex changing reef fishes.

17 August

- Kuwamura, T.: Introductory remarks.
 Cole, K. S.: Longitudinal and temporal patterns of spawning and egg loss in the staghorn damselfish (*Amblyglyphidodon curacoa*).
 Reavis, R. H.: The evolution of monogamy in a coral-reef fish with abundant resources.
 Mazeroll, A. I.: Spatial knowledge and cognitive maps in brown surgeonfish? You be the judge.
 Yabuta, S.: A tail-up display of the monogamous butterflyfish in inter- and intra-pair interactions.
 Meadows, D.: Patterns, courses and consequences of territory clustering in the threespot damselfish.
 Clifton, K.: Variable resource renewal and the economics of territoriality: depth-related patterns of algal food quality, intruder pressure, and behavior for an herbivorous coral reef fish.
 Righton, D.: Variation in territorial and social systems of the three corallivorous red sea butterflyfishes.

(赤川 泉 Izumi Akagawa: 〒164 東京都中野区南台
1-15-1 東京大学海洋研究所)

全て是一片の魚類化石から始まったといっても過言ではない。

1975年に北九州市内の山田弾薬庫跡地(現在の山田緑地)で多くの断片的な魚類化石が発見され、1976年と1977年に北九州市が発掘調査を行った。発掘調査団の顧問には九州大学名誉教授であり福岡大学教授の鳥山隆三博士、団長には秋吉台科学博物館の太田正道博士があたり、国立科学博物館の長谷川善和博士、ルーテル神学大学の上野輝彌博士、佐賀大学の西田民雄博士をはじめ、北九州市からは曾塚孝先生や北條凱生博士などが参加された。また、多くの学生も参加し、日本で初めての本格的な魚類化石発掘調査となった。この発掘調査で大量のニシン科魚類化石が産出し、1979年に上野輝彌博士によって *Diplomystus* 属の2種が新種記載された。中生代の魚類化石がこのように大量に見えられたのは日本では初めてのことであり、この貴重な標本を保管展示する機関として自然史博物館が開設されることになった。

博物館開設にあたっては鳥山隆三博士の尽力によるところが大きく、当時の谷 伍平市長の科学文化に対する理解もあって、それまでの日本にはない欧米型の自然史博物館を目指して設立された。鳥山博士はフズリナの世界的研究者で、1977年から1978年まで日本古生物学会会長をつとめられた。また、秋吉台の保存と秋吉台科学博物館の設立にも貢献された。

北九州市立自然史博物館の開設

1977年3月、鳥山隆三博士、九州大学名誉教授の三宅貞祥博士、九州大学医学部教授の永井昌文博士、太田正道博士により「北九州市立自然史博物館の建設について」の意見書が出され、同年、自然史博物館建設調査委員会が設置された。この委員会の答申を受け、1978年4月に北九州市自然史博物館開設準備室が戸畑市民会館の一角にオープンした。

建設調査委員会から提出されたこの答申は北九州市立自然史博物館のバックボーンとも言えるものである。この答申で特に強調されているのは、調査研究活動と文化財としての資料収集、整理保管の重要性である。当時、日本の博物館では展示と教育普及に重点がおかれ、調査研究と博物館資料(文化財)の収集整理保管という活動

はとかく軽視されがちであった。しかし、博物館資料の収集とそれに基づく調査研究があって初めて説得力のある展示と普及活動が出来るのであり、私達はこれまでこの答申に基づいて活動を行ってきた。

1978年9月に資料収集委員会が設置され、翌年1月には北九州自然史友の会が発会した。同年3月にはソ連科学アカデミーと標本交換を行い、一挙に収蔵標本が増加した。11月には中国の大連自然博物館と標本交換を開始するなど本格的に標本収集に乗りだした。準備室時代に北海道や沖縄など日本各地で、海外では台湾とアメリカで資料収集を行った。

3年間の準備室を経て北九州市立自然史博物館は1981年5月にJR八幡駅ビル内に仮施設としてオープンした。これは博物館建設予定地が定まらず、本館建設の見通しが立たない情勢の中での second best の選択であった。その後、1982年に分散してあった2つの収蔵庫を撤収し、旧水道局の建物に移設、今日に至っている。自然史博物館の開設に中心的役割をはたされ、初代館長をつとめられた鳥山隆三博士は本館建設を見ずして1990年6月2日他界された。鳥山博士と共に館開設に奔走された太田正道博士は当初は副館長として、そして現在は館長として実質的な館の運営にあたられている。

博物館の主な施設と展示

本館はJR八幡駅ビルの中にある。2階に常設展示室、3階に事務室、学芸員室、普及室や図書室など、4階に企画展示室(講座室)、友の会事務局などがある。この他に旧水道局の建物と旧皿倉小学校天神校の一棟を分室として使用しており、ここには企画展示室(旧水道局)、収蔵展示室(旧水道局)、収蔵庫、研究室などがある。

本館の延べ床面積は1394.7平方メートルで、2階の常設展示室の面積が588.7平方メートル、3階は2階とほぼ同じ、4階は130.3平方メートルある。常設展示は5つのテーマで構成されている。第1テーマは「北九州の生い立ち」で、導入部はこの博物館開設のきっかけともなった北九州市産白亜紀淡水魚類化石である。石炭紀のウミユリ類化石、石灰岩台地平尾台、漸新世芦屋層群の化石、平尾台洞窟産の更新世化石など北九州の過去の自然を時代別に紹介している。第2テーマは北九州の動植物で、北九州の魚類、昆虫、鳥獣類、貝類などから構成されている。第3テーマは無脊椎動物の系統と進化、第4テーマは脊椎動物の系統と進化である。脊椎動物の系統と進化では無顎類から始まり硬骨魚類へと続く進化の様子を実物化石や現生標本を展示し解説している。軟骨

魚類のコーナーではホホジロザメの剥製とカルカロドン・メガロドンなど化石ホホジロザメ類を展示し、ホホジロザメの祖先を巡る最近の論争なども紹介している。

分室(旧水道局)は地下1階、地上3階、延べ床面積は2694.8平方メートルで、企画展示室と収蔵展示室がある。企画展示室では年3回企画展を行っている。収蔵展示室は1階が水の生物、2階が鳥獣類剥製、昆虫、貝類などの乾燥標本、3階は岩石鉱物と化石、恐竜である。また、裏庭には珪化木など化石岩塊、岩石などを展示している。1階の水の生物の展示室では造礁珊瑚や甲殻類剥製、鰓脚類剥製、鯨類骨格のほか、大型のサメ類剥製を展示している。また、北九州市で捕獲された全長8.7メートルのウバザメの剥製標本は別棟に展示している。分室の収蔵展示は年3回の企画展開催時に開放するほか、希望があれば団体に限り見学することができる。

展示標本は本館常設展が約3000点、分室(旧水道局)が約7000点、併せて約10,000点である。

分室(旧皿倉小学校天神校)は地上3階一棟、延べ床面積は1797平方メートルで、収蔵室、研究室、解剖室などが配されている。

博物館の職員構成

現在、博物館の職員は15名で、館長1名(常勤嘱託)、学芸員7名(課長職1名、係長職3名)、事務職5名(副館長1名、課長1名、係長1名、係員1名、嘱託1名)、顧問(嘱託)2名からなる。顧問は九州大学名誉教授の白水隆博士(昆虫)と北九州大学名誉教授の畑中健一博士(植物)である。館長は太田正道博士(地質古生物)で、特にフズリナ類が専門である。各学芸員の専門はそれぞれつぎのとおりである。藤井厚志主幹(地質・理学修士)、上田恭一郎主査(昆虫・農学博士)、岡崎美彦主査(古脊椎動物・理学修士)、藪本美孝主査(魚類・理学博士)、武石全慈(鳥類生態・理学博士)、馬場稔(哺乳類生態・理学博士)、真鍋徹(植物生態・学術博士)である。

博物館の活動

当館の活動については1977年の建設調査委員会の答申の基本活動構想図(図1)がわかりやすいので参考にされたい。基本的には(1)資料の収集と保存、(2)調査研究、(3)展示・教育普及活動の三つの大きな活動から成り立っている。ここでは主な項目について簡単に紹介する。

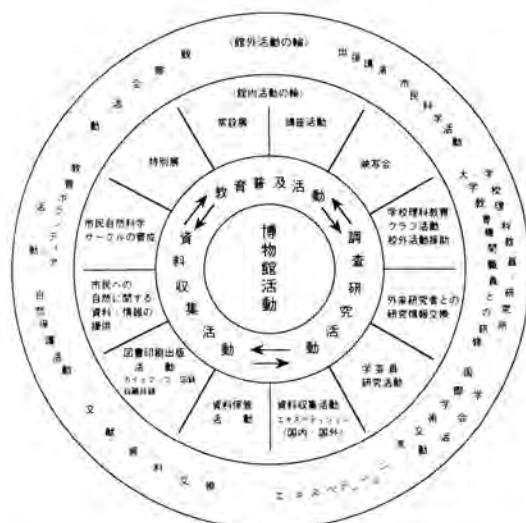


図 1. 北九州市立自然史博物館基本活動構想図.

1. 資料の収集と保存

現生魚類標本は沖縄産魚類と九州周辺の海水・淡水魚類などが主なものである。最近、西海区水産研究所から油谷湾産魚類標本と矢野和成博士から駿河湾産ツノザメ類標本が寄贈された。魚類化石は北九州市産白亜紀淡水魚類化石、北九州市産漸新世海水魚類化石、種子島産更新世海水魚類化石、大分県玖珠盆地産淡水魚類化石など西日本と九州の魚類化石を中心に収集を行っている。また、国外の魚類化石コレクションではワイオミング州産始新世淡水魚類化石、ブラジル産白亜紀魚類化石などがある。

魚類以外の主な標本は、昆虫標本では北九州産蝶蛾類をはじめ世界の代表的な蝶類標本を集めた赤居正太郎コレクション、森下和彦マダラチョウコレクションなど日本有数の昆虫コレクションがある。また、ブラジル産白亜紀昆虫化石や美祿産三疊紀昆虫化石は学術的にも重要なコレクションである。岩石鉱物標本は松本唯一コレクション、小川留太郎コレクションおよび九州工業大学からの寄託標本が大きな部分を占める。化石では背屋層群漸新世動物化石、平尾台産第四紀動物化石のほか、7体の大型恐竜全身骨格（レプリカ）などを有する。このほか主なコレクションとして三宅貞祥甲殻類コレクション、高橋五郎貝類コレクション、吉岡重夫植物コレクションなどがある。保存についてはすでにスペースが足りない状態である。

標本の登録は資料受け入れ票に一件ずつ記載して登録している。以前は手書きでおこなっていたが、現在では

パーソナルコンピューターのデータベースに入力し、プリントアウトしたものと両方を保存している。現在当館の総標本数は約 32 万点で、そのうち登録済みのものは 49,050 点である。

二次資料である文献はすでに 7 万冊を超えている。文献収集は購入、研究報告などとの交換、そして寄贈によるものである。寄贈された大きな蔵書にはそれぞれ鳥山隆三文庫、三宅貞祥文庫、松本達郎寄贈図書、太田国光寄贈図書など寄贈者の名称を付して専用の書架に保存している。

2. 調査研究

博物館開設のきっかけともなった北九州市産白亜紀淡水魚類化石については、ほぼ研究が終り、現在中国科学院と共同で中国産魚類化石群との比較研究を進めている。種子島産更新世魚類化石については現在一つ一つの種について現生種との比較を行っており、当館所蔵のその他の魚類化石についても順次研究を進めていきたいと考えている。当館学芸員の研究成果は主に「北九州市立自然史博物館研究報告, Bulletin of the Kitakyushu Museum of Natural History」で発表しているので研究活動の具体的な内容については、これをご覧いただきたい。本誌は開設準備室が発足した翌年(1979 年)から出版している。原則として年 1 回の発行で現在第 14 号まで出ており、国内 437 箇所、国外 250 箇所の大学や博物館、研究機関などと交換している。

3. 展示・教育普及

当館では企画展を春、夏、秋の年 3 回行っている。春はゴールデンウィークを挟んだ 3 週間、夏は夏休み期間中約 40 日間、秋は文化の日を中心に約 2 週間である。魚類関係では、昨年夏に国立科学博物館との共催でサメに関する展示会を行った。また、今年の春はブラジルの化石展を開催した。

教育普及活動としては室内講座を年 4~5 回、野外観察会を 7~8 回、夏休みには自然史夏休み教室として 5~6 講座の野外観察会などを行っている。また、今年から展示解説ボランティア養成講座を開講した。

この他、当館には北九州自然史友の会がある。水生動物、両生爬虫類、鳥類、昆虫、植物、化石、岩石鉱物の 7 つの部会があり、隔月または毎月 1 回例会を行っている。また、毎年春に友の会会員による研究発表会がある。会員は 886 名(10 月 18 日現在)である。年 4 回会誌「わたしたちの自然史」を発行しており、これは当館の普及誌として内外の博物館と交換している。

おわりに

上述したとおり、自然史博物館専用の建物がない不完全な状況でこれまで博物館活動を行ってきた。展示や教育普及は当然であるが、資料収集と研究調査にも大きなウェイトを置いてきた。建物は出来ていないものの、活動面では結果として成功しており、それなりの評価を受けているものと考えている。

現在、3つの建物に分散した形で博物館活動を行っているが、北九州市では来年度中に自然史博物館建設用地を決定し、自然史博物館新館建設の本格的な検討に入る予定である。それでもオープンまでにはなお数年を要する。当館設立のきっかけともなった魚類化石の発見からすでに20年、四半世紀を超える自然史博物館作りになるかもしれない。

(籾本美孝 Yoshitaka Yabumoto: 〒805 北九州市八幡東区西本町3-6-1 JR 八幡駅ビル内 北九州市立自然史博物館)

魚類学雑誌
42(34): 340-341, 1995

半島部マレーシアの魚類に関する文献について
Literature on Fishes of Peninsular Malaysia

前回の「フィリピンの魚類に関する文献」(魚類学雑誌41巻3号)に続いて、マレーシアの半島部の魚類に関する文献を紹介いたします。これらの文献は、昨年(1994)の11月と今年の8月にマレー半島東海岸のクアラトレンガヌーで魚類の採集・同定作業を行う機会に恵まれた際に収集したものです。文献数が少ないので、著者のアルファベット順に簡単に解説します。

A. K. Mohammad Mohsin and Mohd. Azmi Ambak. 1983. *Freshwater Fishes of Peninsular Malaysia*. Penerbit Universiti Pertanian Malaysia. xvii + 284 pp.

半島部マレーシアに分布する149種の淡水魚の紹介。目、亜目、科、属、種への検索表が図入りで説明されており、魚類を同定する際には便利。また各魚種の線画あるいはカラー写真も付いている。さらに魚種ごとに、分布、食性、食品としての価値などが記載されている。

魚類の紹介以外にも、*Ichthyological Literature of Peninsular Malaysia* という項目やマレー半島の地史的説

明、さらには採集場所の環境などの生態的記述があって、マレーシア半島部の情報を収集するには便利な文献。

Abu Khair Mohammad Mohsin, Mohd. Azmi Ambak and Muhammad Nasir Abdul Salam. 1993. *Malay, English and Scientific Names of the Fishes of Malaysia*. Occasional Publication No. 11, Faculty of Fisheries and Marine Science, Universiti Pertanian Malaysia. 226 pp.

サバ、サラワクを含むマレーシア産魚類の名称のリスト。マレイ名、英名、学名それぞれからの探索が可能。学名を拾っていくと、海産魚711種、淡水魚124種の計835種が数えられた。本文で扱われているマレイ名は、魚の水揚げ場で実際の魚を示して漁師などから直接聞き取り調査を行ったものである。

Anonymous. 1982. *A Colour Guide to the Fishes of the South China Sea and the Andaman Sea*. Primary Production Department/Marine Fisheries Research Department, SEAFDEC, Singapore. 45 + vi pp.

「東南アジアに出現する食用魚類の同定を助ける」という目的で、189種の海産魚を紹介している。見開きの左ページには種の記載、体長、漁法、分布、生息水深、俗名などの説明が、また右ページには対応する魚種の写真が載せられている。

なお、本書の改訂版が1989年に出版されているが、エビ、カニ類が追加されているだけで、魚類には全く変更がない。

Chee Phaik Ean. 1982. *Panduan untuk Mengenal Pasti Ikan-ikan Pelagik Biasa. (a guide to sure knowledge on general pelagic fishes.)* Kementerian Pertanian Malaysia. 42 pp.

アジ科、イワシ類、ツバメコノシロ科、サバ科、カマス科、マナガツオ科、タチウオ科の41種が紹介されている。各魚種に1ページを割当て、「魚類の専門家でない人のための魚種の見分け方を示す」という著者の言葉通り、線画を使いながら、種を見分けるための形態的な特徴を平易に説明している。

Lui Yean Pong, Chee Phaik Ean and Yeap Tho Seng. 1994. *Major Commercial Marine Fishes of Malaysia*. Department of Fisheries, Ministry of Agriculture, Malaysia. 113 pp.

マレー半島の西海岸で見られる海産魚100種をとりあげ、各魚種ごとに色彩画を付けて、学名、英名、俗名、生息環境、主な漁具、大きさなどの説明がなされている。

Mohammed Shaari bin Sam Abdul Latiff. 1971. A Guide to Trawl Species in Penang Waters. Ministry of Agriculture and Land, Malaysia. 150 pp.

マレイ半島西海岸のペナン周辺水域の魚類(50科101種)の紹介。研究材料としたのはペナンの市場での採集に加えて、水深10から25尋で行われたトロール漁の試験操業と水深15尋以深で操業されている民間のトロール船の漁獲物。1ページに1種の割合で、上半分に白黒写真を配し、下半分には記載が行われている。記載は形態の特徴のほか、生息水深、体長などで構成されている。

Scott, J. S. 1959. An Introduction to the Sea Fishes of Malaysia. Ministry of Agriculture, Federation of Malaysia. 180 pp.

合計294種のマレイシア(半島)産の海産・汽水産魚類が紹介されている。分類群によって検索表があったりなかったりする。また各魚種の説明でも、写真付き、線画付き、あるいは記載だけと、様々である。記載では、形態のほか、食用としての価値、分布などが簡単に記されている。

現在出版準備中の文献として

Abu Khair Mohammad Mohsin and Mohd. Azmi Ambak. Marine Fishes and Fisheries of Malaysia and Neighbouring Countries. Universiti Pertanian Malaysia Press.

があげられる。本書は当初今年6月までに刊行される予定であったが、まだ出版されていない。井田齊教授(北里大学)が第二著者に直接会って聞いたところでは、すでに8月の時点で入稿は終えているという。今年中に出版されることを期待したい。

本書の内容を出版前のアナウンスに基づいて簡単に述べる。頁数は600から650。対象は半島部マレイシアとサバ、サラワクからなるマレイシアおよび近隣諸国に分布する魚類となっている。掲載種数は138科に属する708種で、1040図と495枚のカラー写真が掲載される。各魚種の特徴などのほか、魚類の水産に関する情報や70種類についての資源生物学的情報が記載され、さらに570の参考文献が掲げられる。

ここで紹介した文献は、ほとんどが東南アジア漁業開発センター水産資源管理開発部局の図書室で収集したものです。最後になりましたが、国際協力事業団の長期派遣専門家である米盛保(部局前次長)、森慶一郎(部局次長)、柳川弘行、木本秀明の各氏と同部局の職員の方々、および今年8月に短期専門家として共に活動した

井田齊教授(北里大学)に深謝いたします。

(河野博 Hiroshi Kohno: 〒108 東京都港区港南
4-5-7 東京水産大学魚類学研究室)

魚類学雑誌
42(3/4): 341-342, 1995

国連食料農業機構の西部および中央太平洋の魚類
同定ガイド作成作業部会
FAO Workshop for Western Central Pacific Living
Marine Resources Identification Guide

FAO(国連食料農業機構)の魚類同定ガイド作成のための作業部会がフィリピンのマニラで10月1日から10日まで開催された。主催はFAOであるが、フィリピンにあるICLARM(International Center for Living Aquatic Resources Management)が作業部会の実務作業を担当した。また、この作業部会中にICLARMが進めているデータベース(FishBase)作成について説明があり(別記参照)、データベース改訂作業もあわせて行われた。作業部会に参加した研究者は、FishBase職員と一緒に1日コンピュータの前に座ってデータのチェックを行った。

この作業部会の準備はかなり前から始められていた。準備はFAOのKent Carpenterを中心に、オーストラリアのJohn PaxtonやアメリカのBruce Colletteの協力の下に進められてきた。今回の作業部会が扱う西部および中央太平洋は種数が最も多い海域である。その点を視野に入れて、Carpenterは漁業重要種のみを対象にするのではなく、熱帯魚愛好家が重視する魚種も扱い、さらに今回の同定ガイドが今後相当の年数に渡って当該海域の分類学的道標となることを目指して作業を進めてきた。そのため、これまでの同定ガイドより検索表も多くなり、収録する魚類も多くなっている。例えば、深海魚は通常、漁業重要種ではないが、多くの深海魚の科レベルの解説が含まれている。また、これまでの同定ガイドと同様に魚類以外の甲殻類、貝類、頭足類なども収録されている。

同定ガイドに関係した著者の数は85人という膨大な数になった。それぞれの研究者の都合やFAOの予算の制約によって、作業部会に集まったのは34人(日本からは尼岡邦夫、佐々木邦夫、松浦啓一が参加)であったが、会場に並べられた原稿の数は膨大で、壮観であった。

作業部会はメトロマニラのケソン市にあるフィリピン

大学海洋研究所で行われた。作業部会の名前にふさわしく、参加者は早朝5時半には魚市場に出かけて魚を採集し、夜遅くまで作業を続けた。

作業は大きく二つに分けられた。第一に、魚市場から採集した魚を原稿に基づいて同定し、検索表や原稿の内容に改良すべき点があるかどうか調べ、第二に参加者に他の著者が作成した原稿を割り振って校閲作業を行うというものであった。第一の作業には、フィリピン大学の大学院生などが著者の原稿を吟味する役割で参加し、気づいた点を校閲用紙に記入して主催者に提出した。著者が作成した検索表を他人が使うと分かりにくいことはよくある。検索表を使用する人と著者が隣に座って魚を調べるといのは、なかなかよい方法である。ただし、検索表を作成した著者が校閲者の検索作業に助言を与えることは禁じられていて、作成した検索表がうまく機能せず、当惑する著者もかなりの数にのぼった。

第二の原稿の校閲作業は校閲室にこもって行った。担当する原稿の数はかなりあり、期間内に終わらず、帰国してからFAOに送付するという人も出てきた。また、校閲作業を行ってみると、かなり名前の知られた研究者でも思わぬ間違いをしていることがあった。

10月7日にはマニラの北西230 kmにあるポリナオにあるフィリピン大学の臨海実験所に場所を移して作業が続けられた。マニラよりは多少魚種が多くなったが、サング礁性魚類の数は思ったほど多くなかった。フィリピンではダイナマイトと青酸カリを使用した密漁が後を絶たず、漁業資源にかなりの被害を与えているようである。

同定ガイドは1996年半ばに出版される予定である。今回の作業部会の結果を著者が検討して、原稿を改訂する作業が今後行われる。80人を越える著者を督励して作業を行うのは大変な作業であるが、Carpenterの意気込みと彼を支えるFAO本部の職員の熱意を考えると、1996年中の出版は十分に可能であろう。出版物の形式はこれまでと異なり、バインダー形式ではなく、製本された本となる。既に東部太平洋の同定ガイド(3巻からなり、1995年出版)が完成していて、会場で紹介されたが、これと同じ形式となる。もちろん東部太平洋より種数が多い海域であるから、巻数も相当多くなるであろう。会場で見た原稿は各グループの専門家が準備したので、情報量は豊富で、図もふんだんに使われていた。この海域の魚類を研究するための座右の書となることは間違いないという印象を受けた。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒169 東京都新宿区

百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部)

魚類学雑誌
42(3/4): 342-343, 1995

ICLARMで作成されている魚類データベース FishBase: A Biological Database on Fish

フィリピンのマニラに本部がある ICLARM (International Center for Living Aquatic Resources Management) で魚類データベース (FishBase) 作成の作業が進められている。このデータベースは Dr. Rainer Froese (ドイツ人) を中心にして構築されてきた。作業は5年前から始まり、現在、約10人の専属スタッフが入力作業を行っている。

取り扱うデータは魚類に関するあらゆる情報である。ICLARMの性格上、水産重要種に力点が置かれているが、すべての魚種(現在、12,000種以上)に関する情報を入力している。入力されるデータは、魚種名をはじめとする分類学的情報(シノニム、著者、文献、通俗名、分布など)、生態情報、資源情報、それぞれの分野の文献情報など、広範囲にわたっている。FroeseはEschmeyerと緊密な連絡をとり、Eschmeyerの属に関する情報はもちろんのこと、彼が作成中の種のカatalog情報もFishBaseに取り込んでいる。

例として、モンガラカワハギを選択すると、その学名の変遷、現在の valid name、著者、分布(世界地図上にプロットされ、緯度経度もわかる)、生息環境、形態的特徴、最大体長、標本写真、生態写真などがディスプレイに次々と示される。このことから分かるように膨大なデータ量であり、ファイル容量は数百メガバイトに達している。FishBaseは50のTable、1000項目から構成されている。また、カラー写真や線画などの大量の画像データも含まれている。使用しているソフトはマイクロソフトのアクセスである。

Froeseを中心とするFishBaseのメンバーは魚類研究者からのあらゆる情報に関心をもっている。特に日本の情報は不足していると言っている。別刷や出版物など、提供できる情報をお持ちの方は彼に連絡していただきたい。協力者はFishBaseからデータベース情報を受け取ることができる。また、Froeseは日本語で出版された情報を入力したいが、日本語を読めるスタッフがいないので困っているとのことである。ユネスコを通じて、日本の修士卒業程度の知識をもつ人を募集しているが、まだ

返事がないとのことであった。もし、興味のある人がいたら、彼に連絡していただきたい。FishBaseのスタッフの大半は若い女性で、フィリピン大学の大学院生(修士)である。また、FishBaseのデータはCD-ROMで提供されいて、実費を払えば送付してくれる。連作先は下記の通りである。

Dr. Rainer Froese
Fish Base Project
ICLARM
2nd Flr., Bloomingdale Bldg.
Salcedo Street, Legaspi Village
Makati City 0718
Philippines
電話: +63-2-818-0466/818-9283
FAX: +63-2-816-3183
E-mail: r.froese@cgnet.com

(松浦啓一 Keichi Matsuura: 〒169 東京都新宿区
百人町 3-23-1 国立科学博物館動物研究部)

魚類学雑誌
42(3/4): 343, 1995

Announcement from Dr. C. Richard Robins

After 38 years at the University of Miami, Dr. C. Richard Robins retired as Maytag Professor of Ichthyology in 1994. He and his wife, Dr. Catherine H. Robins, also an ichthyologist, now reside at 448N 1500 Road, Lawrence, Kansas 66049-9190 (Phone: 913-887-6907). Dr. Robins is now Adjunct Curator of Fishes at the University of Kansas Natural History Museum, Dyche Hall, Lawrence, Kansas 66045-2454, where he is continuing his ichthyological research. He is anxious to renew reprint exchanges which were largely interrupted when Hurricane Andrew hit Miami in 1992.

(C. Richard Robins: 448N 1500 Road, Lawrence,
Kansas 66049-9190, USA)

シンポジウム「水産業に関するいくつかの疑問」の お知らせ

日本学術会議の水産学研究連絡委員会では、水産業、水産学についての一般の理解を深めていただくために、下記のようなシンポジウムを開催します。

記

日 時: 1995年12月2日(土) 13:00-17:00
場 所: 東京水産大学

演 題: 13:00-13:05	開会の挨拶	清水 誠 (東大農)
13:05-13:35	漁業は世界の食料問題にどの程度関与できるか?	小野征一郎 (東水大)
13:35-14:05	漁業は環境にやさしいか?	有元貴文 (東水大)
14:05-14:40	海は漁業者のものか?	倉田 亨 (近大農)
14:40-14:55	休憩	
14:55-15:25	資源管理はできるのか?	松宮義晴 (東大海洋研)
15:25-15:55	養殖魚は安全か?	若林久嗣 (東大農)
15:55-16:25	水産物は健康によいか?	平野敏行 (東水大)
16:25-16:55	総合討論	
16:55-17:00	閉会の挨拶	小泉千秋 (東水大)